難波西鶴と海の道【48】

森田　雅也

「商人の中の商人」金屋某

遊女利用も恩返し忘れず

前回まで書いてきましたように、西鶴の『日本永代蔵』［元禄元（1688）年刊］巻四の二「心を畳込む古筆屏風」には、長崎商いにかける博多の商人、金屋某を描いています。

金屋は、50両（約500万円）という全財産を持って長崎にやってきましたが、そんな大金も長崎商いではした金。商いに参入する資格もありません。

「わざくれ心（自暴自棄）」になった金屋は、三都の遊里に次ぐ大悪所、丸山遊郭へと足を踏み入れます。

「今宵ばかりを一生のおさめ」と腹を据え、昔、商売が繁盛していた頃のつてを頼って、花鳥太夫と逢い、深いなじみとなります。

そんなある夜、枕元の枕屏風をふと見ると、総金箔の立派なもので、「古筆切」や短冊がすき間もないほど貼ってありました。

「古筆切」とは、平安時代から鎌倉時代にかけての歌集、物語、経巻などを、数行または1枚に切断したものです。紀貫之筆の伝承がある「高野切」、藤原行成筆の「本能寺切」などは国宝級ですが、それ以外でも所有者の来歴や、書かれている料紙だけでも中国からの舶載物、つまり輸入古紙として価値があるものもあります。

鑑賞用としての掛け軸に、書道の手本に、江戸時代の人々の間でも1級の骨董品として、高く取引されました。

物に不足のない長崎の遊郭だけに、こんな上等な物が日常の枕屏風として用いられていたのでしょう。

金屋某は、その貼り混ぜの屏風が相当に価値が高いことを見て取りますが、中でも藤原定家の真筆に間違いない小倉色紙が逸物であることに気づきます。

そうなると、花鳥との恋心は、この屏風を手に入れる手立てにすぎません。手練手管に長けた遊女を逆に手玉にとって、まんまと屏風を譲り受けます。

金屋は屏風を手に入れるやいなや、花鳥に何も言わずに上方に行き、大名衆に売りさばき、かなりの大金を得て、再び、大金持ちになり栄えます。

ここで終わると、この男は商人として大成しても人間性が許せませんが、西鶴はちゃんと後日談を用意します。

大金持ちとなった金屋は、再び長崎を訪れ、花鳥太夫を身請けしますが、そのまま、花鳥太夫の懸想人のいる豊前の漁村に、嫁入り道具一式そろえてやって、嫁がせてやります。もちろん、花鳥の喜びと感謝の大きさは言うまでもありません。

人は評して「一たびは傾城（遊女）をたらす（たぶらかす）といへど、これらは悪からぬ仕かた、その目利（鑑識眼）ぬからぬ男」です。

「世間皆これをほめける。」まさに商人の中の商人ですね。

（関西学院大学文学部文学言語学科教授）